

放課後博物館へようこそ ～平塚市博物館の活動から～

お話し：浜口 哲一 さん (平塚市博物館学芸員)

* 2003年1月12日開催 博物館講演会の講演収録 抜粋

■目指すは「地域型博物館」

平塚市は神奈川県のおぼ中央、相模平野の南部に位置する首都圏のベッドタウンです。都市化が進んだ地域と自然が多く残る農村部が共存しています。このまちで1960年代末に博物館をつくる話がもち上がり、71年に博物館準備室が設置されて、どんな博物館にするのか大いに議論しました。「誰が利用する博物館か」「何を扱う博物館か」。その結果、平塚の博物館は、地域に暮らす人たちが、地域を見直す手がかりになるような「地域型の博物館」を目指そうということになりました。

■活動を支える大きな力

こうして地域の再発見をテーマに掲げて76年に博物館を開館しました。開館当初から市民参加について積極的に考えていたわけではなかったのですが、活動を始めてみると、博物館の事業は、一方的に利用者にサービスしたり、楽しんでもらうだけではなく、参加者と一緒に大きな仕事をやれることが分かってきました。

例えば、「漂着物を拾う会」では、貝に詳しい方が中心となって海岸で拾った貝の種類をリストアップし目録を作りました。また、「相模川を歩く会」のメンバーは、5年かけて山梨県の山中湖の源流まで歩き継ぎ、さらに2年間補足調査をして見聞したことを300ページもの「相模川事典」にまとめ上げました。

市民参加型の調査もあります。「セミの抜け殻調べ」では、みんなで場所を分担して抜け殻を集め、セミの地図を作って展示しました。抜け殻の標本も多

数蓄積され、調査結果を「セミのぬけがら調べ」と題する刊行物にまとめました。その後この調査は、近隣地域のグループや博物館とも共同調査をやるくりに発展していきました。

また「神奈川県植物誌調査」の場合は、神奈川県内の自然史系博物館との共同プロジェクトで県内の植物相をまとめた本をつくるための調査を行いました。「植物誌調査会」という200人ぐらいの市民グループが、自分の住んでいる地域の博物館をベースキャンプにして現地調査に出かけ、集めた標本を整理しました。このプロジェクトは、79年から始めて20年くらい活動していますが、88年に約1400ページの「神奈川県植物誌1988」を刊行し、その後、また調査をして、2冊目の「神奈川県植物誌2001」を出版しました。

このように「館主体の行事」から「会員制行事を通じた地域のフィールドワーク」へと活動を広げて、その成果を本や展示として結晶させることができました。博物館のスタッフだけではできないことも、みんなの力を合わせることで可能になるということに身に染みて感じるようになりました。

博物館としては、ボランティアが活動拠点として動きやすいような体制を整えるとか、学芸員自身もその調査員の一人となって動くとか、標本の情報を集約して、県の博物館に大きなデータベースをつくるとか、そういうことをやってきました。

(次ページにつづく)

■放課後博物館と遠足博物館

このようにいろいろな活動を積み重ねてくると、私も含めて館のスタッフの博物館に対する見方がだんだん変わってきました。突きつめていうと、博物館は「放課後博物館」と「遠足博物館」の2つのタイプに分けられるのではないかと考えています。

放課後博物館は、何かを調べに行く、行事に参加する、ボランティアとして手伝いに行く、遊びに行く、そういう日常的な使い方をする博物館をいいます。利用の仕方もさまざまな形があります。そこは、ありふれたもの、今まで見落としてきたものに気づくとか、何げなく見ていたものに新しい意味を見つけるとか、そういう楽しみがある博物館だと思っています。そのためには入場無料で、いつでも、誰でも、自由に出入りできることが、放課後博物館にはすごく大事だと思います。

これに対して、一生に一度、あるいは年に一度行く、そういう使い方をする博物館を遠足博物館と名づけました。どちらかという、遠足博物館は、展示を見ることが利用の中心で、普段見られない珍しいものに出会うことができたり、日頃できないような経験が積めるといったように非日常的な楽しみがある博物館です。

誤解のないように付け加えますが、放課後博物館がすぐれた博物館で、遠足博物館は古くさいと言っているわけではありません。遠足博物館と放課後博物館は、博物館の両輪だと考えています。放課後博物館が果たせる役割もあるし、一方で、遠足博物館でなければ果たせない役目もあって、それぞれが両立

して初めて良い博物館環境ができると考えています。ただ、市町村の場合は、そこに暮らしている人やそこで育っている子供達にとって大きな意味のあるような放課後博物館を活動のベースにしてほしいな、と思っています。

■地域に生きる博物館

最近、平塚では、博物館の活動が地域にいろいろな影響を及ぼす機会が増えてきました。一昨年、市が策定した環境基本計画には、博物館が今まで市民参加で調べてきた地域のいろいろな自然環境の情報が、生かされたとはまでは言えないかもしれませんが、一応、取り上げられて話題になりました。また、かつて平塚に暮らしていた文人「村井弦齋^{げんさい}」を博物館の特別展で取り上げたところ、商店街が彼にちなんだ名物カレーやそばの特別メニューをつくって売り出すなど、博物館がまちおこしのきっかけをつくることになりました。

このように博物館の活動を通して、個々の市民だけではなく、商店街や青年会議所など、地域社会のいろいろな組織や団体とのつながりが深まってきたと感じています。博物館の存在意義がそのあたりにもあるのではないかと思います。平塚の博物館が、単に博物館の世界のことだけではなく、地域社会における役割も視野に入れて活動していると理解していただけたらうれしいと思います。

もっとお話をしなければ分りにくいところもあつたと思いますが、お約束の時間になりましたので、ここで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。



▲ 講演後には来場のみなさんと「札幌型の市民参加博物館」について、自由な博物館談義が盛り上がりしました。

講座・体験学習会・企画展のお知らせ 5月3日(土・祝)開館!

① 博物館体験学習会 タンポポを知りつくす! ~春の植物観察会~

日時 5月24日(土) 午前10時~12時 **会場** リンケージプラザ前庭および博物館活動センター実習室
対象 小学生~大人 **定員・費用** 20名 無料 **講師** 山崎 真実 (札幌市博物館活動センター学芸員)

② 博物館体験学習会 化石採取会

日時 6月21日(土) 午前8時30分~午後4時30分 **会場** 滝川市空知川
対象 小学4年~大人 **定員・費用** 40名 無料 **講師** 古沢 仁 (札幌市博物館活動センター学芸員)

③ 博物館体験学習会 水生昆虫観察会

日時 6月22日(日) 午前9時~午後2時 **会場** 豊平川上流
対象 小学4年~大人 **定員・費用** 30名 無料 **講師** 斉藤 和範さん (旭川大学女子短期大学部非常勤講師)

参加する行事名・住所・氏名・年齢・電話番号・FAX番号を明記し、それぞれ①5月15日(木)、②6月10日(火)、③6月17日(火)、(①②③とも必着)までに博物館活動センターへハガキまたはファクス、Eメールmuseum@city.sapporo.jpにて申込。ホームページhttp://www.city.sapporo.jp/museum/からも申し込みできます。いずれも多数時抽選。

第7回 iミュージアム企画展

「サッポロのふわふわ展」5月3日(土・祝)まで延長して展示します!!

第8回 iミュージアム企画展

野幌森林公園のアライグマ ~移入動物の現状と問題点~

開催期間:平成15年5月10日(土)~6月21日(土)

主催:アライグマ研究会、酪農学園大学獣医学部寄生虫学教室(野生動物学)、札幌市博物館活動センター
会場:iミュージアム・ギャラリー(博物館活動センター5階)

My Field マイフィールド さっぽろ

札幌市内・周辺を主なフィールドに自然観察等の野外活動を行っている個人・団体を紹介していきます。

昆虫少年の心で はやし みちこ 林 迪子 (札幌市環境教育リーダーEcokon 事務局長)

Ecokonは、環境教育リーダーの養成研修(札幌市主催)を修了した者の自主的な研修グループです。平均年齢はちょっと高めですが、草花や昆虫を観察する時の輝く眼は、少年少女そのものです。トンボの観察に最適な西岡水源池では、オオルリボシトンボを始め、たくさんのチョウや甲虫類に出会えて満足の日でした。種名を同定するだけでなく、昆虫をめぐる生態系を考える学習を今年度も計画的に行う予定です。

そして、身につけた力を学校の総合学習のお手伝いという形で発揮したいと張り切っています。



▲ 広場にヤンマが来てくれた

編集後記

来館者数 **12,264**人 (2003年3月末現在)

14号で取り上げたガマの穂ですが、その後読者や来館者の方々から情報をいただきました。ありがとうございました!(改訂版ガマの穂地図は第17号に掲載予定。)生育地の川底がさらわれてガマがなくなった、と再度電話くださった方も。その他、来館者の方からは戦時中はガマの穂綿を布団につめたという体験談もありました。展示室にいと、資料から引き出される子供から大人までそれぞれの世代の声を聞くことができました。(ま)



さっぽろ市
03-F09-03-136
15-2-9